

ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任

2022年度の担当科目一覧表

科目区分 (教養/専門/教職)	科目名	種別 (必修/選択)	開講時期	受講者数
教職	教育相談	教職必修	2年前期	23
教職	特別活動・総合的な学習時間	教職必修	2年前期	17
教職	教育実習事前事後指導	教職必修	2年前・後期	18
教職	教育実習	教職必修	2年前・後期	25
教職	教育実習事前事後指導(栄養教諭)	教職必修	2年前・後期	7
教職	生徒・進路指導論	教職必修	1年後期	16
教職	生徒指導論(栄養教諭)	教職必修	1年後期	7
教職	特別活動・総合的な学習時間(栄養教諭)	教職必修	1年後期	7
教職	教職実践演習	教職必修	2年後期	17
教職	教職実践演習(栄養教諭)	教職必修	2年後期	7
専門	保育基礎1	必修	1年前期	42
専門	保育基礎2	必修	1年後期	40
専門	ゼミナール1	必修	2年前期	4
専門	ゼミナール2	必修	2年後期	4
専門	子ども理解と教育相談	必修	2年後期	35
教養	社会人入門3	必修	2年前期	16
教養	社会人入門4	必修	2年後期	16

*科目区分:「教養」,「専門」,「教職」の3つから指定すること。

*種別:「必修」,「選択」の2つから指定すること。なお、選択必修は「選択」とする。

2. 教育の理念

大学教員としての私の役割は、単に中学校教諭、栄養教諭、幼稚園教諭、保育士資格という免許資格の取得に向けた学びに止まらないことである。義務教育9年間と、その土台をつくる幼稚園、保育所の教育・保育について、特に「人間性」教育という一筋の流れがあることについて、学生に働きかけていくことにあると信じている。学生に様々な思考実験を重ね、それを柔軟に自らの実践に結びつけられるようにしたい。そのための私の基本的な教育の理念は、次の3つである。

(1) 私の専門領域である教育経営学を中心として、教育学の中での「人間性」に関わりのある生徒指導、教育相談、特別活動・総合的な学習の時間における知見を広く紹介し、学生が柔軟に教

育の方法としての実践的な課題解決に役立てられるよう手助けする。(2)教育における「人間性」という規範的な命題が、既習のものとして認識されたり、逆に崇高なものとして届かぬ命題となってしまうのを避けるため、実際に起こっている教育現場での営みを適宜事例として出ししながら、学生が実感をもって捉えてくれるよう働きかける。(3)教育者・保育者としての実践において、その「人間性」の原点は、大学教員として受講者である学生に公平、平等に接することであり、学生個々の環境、状況にも配慮する教育実践を行う。

3. 教育の方法

いずれの授業科目においても、先に述べた教育の理念にしたがって、教育における「人間性」を意識しながら、私の専門分野の知識のみならず、広く教育学の研究から得られた成果を学生に紹介することにする。また、授業には常にアクティブラーニングを取り入れ、学生の主体的な学びを中心に置き、教師の一方的な講話に終わらないようにする。

アクティブラーニングの中心はグループワークであるが、単なるグループでの話し合いに終わらないように、質の高いワークとなるように工夫する。そのためには何らかの形で質疑応答の機会を設け、私と受講生とのコミュニケーション、受講生同士のコミュニケーションを図っていく。

このコミュニケーションによって、私自身が受講生のコミットメントの状態や理解度を知ることができる。また、受講生にとってもそれまで自らが抱いていた理解とは異なった理解に至ることが期待できると思われる。なお、私が受講生とコミュニケーションをとるにあたっての留意点を示すと、以下のようになる。

(1)随時受講生からの質問を受け付ける。(2)受講生の発言内容が特定の知識に偏っている場合、相容れない知見をあえて提示する。(3)受講生が多い授業の場合、授業に対するコミットメントが低下していると思われる受講生や、教師側を注視しているなど、質問や意見がありそうな表情をしていると思われる受講生に質問や意見を促す。あるいは質問を投げかける。(4)受講生が少ない授業の場合、個々の学生にプレゼンテーションを課し、質疑応答を丁寧に行う。

成績評価にあたっては、教職科目については必ず「教育実習」を前提とした知識技能、思考、判断、表現力を評価基準の中心に据える。そして、特定の専門分野の知識を押し付けないことを基本方針とする。成績評価はこれに従い、学習プリントの記述や授業中の発表における実際の、実践的な思考力、判断力、表現力をもとにした情意面での評価を中心にするようになる。そのため、定期試験よりは日常の授業におけるルーティンとしての課題レポート、授業での発表内容等を主な評価材料として活用する。

また、個々の課題レポートごとに必ず評価を行う。その際の評価を数値的な評価だけではなく、コメント記述による評価に重点を置く。できるだけよい気付きや学修成果に関するコメントを記述し、受講生の学びの意欲が継続、向上するように形成的な評価を行う。

また、この課題レポートの提出回数をできるだけ多く設けることで、評価の偏りや、評価の不適正化を低く抑えることができると考える。結果として全体としての評価の客観性を高め、評価の適正化、公正化を図りたい。

また、各課題レポートの内容が感想文に終わらないようあらかじめ受講生に評価方法と評価基準を開示する。具体的には、「講義内容との接点」、「論理の適正化」、「教育者としての視点」、「実現の可能性」の4つの観点を設けて評価することとし、評価基準をシラバスおよび各課題レポート、定期試験にも記載して、受講生への周知を図る。

また、課題レポートは時間を置かず適宜受講生に返却する。それにより学生個々の知識や認識を蓄積、定着させ、学修成果をより「教育実習」、あるいは「教職就職」に有効に影響するようにする。

4. 教育の成果

2022年度後期「授業評価アンケート」によると10科目中7科目で学内全科目平均を上回り、2科目が平均と同じであった。複数教員によるオムニバス授業を除いた、個人担当科目の評価項目で、共通して高かったのが②「話し方は明瞭で聞き取りやすい」、④「教員は学生の参加を促し、適切に対応した」、⑥「教師の意欲や情熱を感じた」の3点であった。従前の数年間において特に評価が高かったのは「話し方は明瞭で聞き取りやすい」、「教師の意欲や熱意を感じた」、「分かりやすく説明しており、学びやすかった」の3項目であった。授業の分かりやすさと熱意というほぼ同様の傾向での評価が続いているものと認識したい。

学生の自由記述にも「はきはきとした声で聞き取りやすい」、「説明がとても分かりやすい」、「先生の熱い授業で眠気も覚めて、教育の場に必要知識をしっかりと身につけた」、「書類ひとつひとつにコメントを書き添えてくださり自信につながった」、「なるほどと思うことやこの授業だから学べることがたくさんあった」、「グループワークもあり、他の人の意見を聞き学べた」等があった。分かりやすさと熱意につながるものがここでも多く見られた。

実際の授業を振り返ると「カウンセリングマインドを用いた会話と傾聴」、「自己理解としての人物画」、「構成的グループエンカウンター」、「模擬学級指導」など、数多くの演習、アクティブラーニングを取り入れていた。また提出課題にも1人1人にコメント記述を書き、意欲を喚起すると同時に評価として返却した。これが授業評価項目の数値や自由記述に現われているものと思われる。

一方、昨年度の評価項目の中で唯一あった課題点が「テキストや配布資料、教材は適切であった」で「特別活動、総合的な学習時間」において全体平均より低い数値が示されていた。(全体平均より-0.15)。今回同科目の同項目は平均より+0.07に転じ、やや改善されたものと思われる。同科目の授業においてテキストの使用回数を増やした結果かもしれない。テキストの適切な使用については、全科目で今後も継続課題として認識したい。

一方、学生の自己評価も同様に10科目中8科目で学内全科目平均を上回った。1科目が平均と同じであった。昨年度は10科目中9科目で学内全科目平均を上回っていたため、同様の高い自己評価が続いているものと思われる。

授業全体としては、学生の自己評価の数値を現わすように、教師と学生との関係がスムーズであった。要因として考えられるのは「模擬授業」、「模擬学級指導」、「グループ別課題研究」等のアクティブラーニングを積極的に取り入れたことである。これらを通して学生個々の思いが表出されたり、個々の特色が出たりした。また、教育実習での体験も十分生かされた発表内容も多く、教育実習が充実したものであったことの一環も垣間見れた。

また、特に当該年度は教員採用試験2次合格者が7名出ており、昨年度の6名合格から続く高い学生の意識と取り組みが継続している。ここ2年続けて教員採用に対する意識が高かったことも授業評価、自己評価とも高評価であった要因の一つとも考えられる。

5. 今後の目標

今後は、受講生の「授業評価アンケート」の自由記述に記載された「先生の熱い授業で眠気も覚めて、教育の場に必要知識をしっかりと身につけた」「書類ひとつひとつにコメントを書き添えてくださり自信につながった」「色々な方向から見た意見や考え方があってなるほどと思う場面が多々あった」等を貴重な意見として捉え、教え込むという姿勢ではなく、受講生のよさを丁寧に認めながら授業を展開していくようにしたい。

教育の方法としては「映像」を用いた教材を積極的に取り入れ、受講生の意欲を高めながら、

同時に必要な知識技能を習得させたい。また、「教育実習」「保育実習」を想定した実際的な授業内容の展開にも重点を置きながら、同時に教員採用試験問題を適宜授業に取り入れ、就職意欲の喚起にもつなげたい。教員採用試験合格を目指す受講生の意欲が高まり、少しでも教員採用試験を目指す受講生の利益となるようにしていきたい。

さらに、研修としての授業参観に止まらず、日常的に他の先生の授業参観を行い、そこから得た知見を参考にして、積極的に授業改善に取り組んでいきたい。

6. 根拠資料

- シラバス
- 授業資料
- 2022年度後期授業評価アンケート結果
- 2023年前期授業改善計画書
- その他（FWJConLine「教育相談」等、担当する教職関係コース等）